

真田幸村（信繁）

戦国最強といわれた武将

川村 優理



慶長三年（一五九八年）。それまで日本を統一していた豊臣秀吉が亡くなりました。

次に日本を治めるのはだれか。最も有力だったのは、徳川家康です。

一方で家康に国をまかせたくないという武将たちもたくさんいました。その中心が石田三成です。

徳川家康方と、石田三成の豊臣方の対立が深まっていきました。

真田信繁（幸村）は、困っていました。

「徳川方か、豊臣方か、我ら真田の武士はどちらに味方すれば良いのだ」

父の真田昌幸と兄の真田信幸、信繁は、戦いの名手で、真田の一族が味方すれば、きつと戦いに勝つだろうと言われていました。

「ぜひ豊臣方として戦ってほしい」と、石田三成からの手紙が届きました。しかしそれ以前に、徳川家康からも味方についてほしいと言われていました。

信繁の父、昌幸はついに決断を下しました。

「われわれ真田の家にとってたいせつなことは一つ。徳川が勝っても、豊臣が勝っても、真田の家が生き残ることなのだ。そのためにわれわれは、二手に分かれることにした。信繁は、わしと共に豊臣方に付け。信幸は徳川に付いて戦功をあげよ」

真田の家を守りぬくためには、どちらかが犠牲になることも惜しまないという考えです。

兄の信幸は父の命令を受け、自分の兵を率いて、真田の陣屋を出て行きました。

「幸村はわしと共に、信濃（長野県）の上田の城に入る。きつと、家康の息子の秀忠が、家康を助けるためにこの城を攻め落とそうとするであろう。そこを返り討ちにするためだ」

父の言ったとおり、その二ヶ月後、徳川秀忠が上田城を攻めてきました。四万人の兵士を連れ、関西で待つ徳川家康を助けに行く途中でした。真田側の兵士はわずか三千五百人。けれど、昌幸と信繁はひるみません。秀忠の軍を城のすぐ近くまで引き寄せると、あちこちに隠れていた兵士がいきなり飛び出て鉄砲と弓を使って攻撃をかけました。

あわてた秀忠の軍は引き返し、川の向こうに控えている二万の軍勢を呼んでこようとしましたが、いつのまにか、川の水がどんだんあふれ出し、橋を渡ることができません。信繁が、川を上流でせきとめておき、水が十分たまったところで、せきを上げたからでした。秀忠は味方を呼ぶこともできず、上田城をあきらめて逃げ出しました。

秀忠の軍勢は、真田軍の作戦のために家康を助けに行くのが大幅に遅れました。

これを知って徳川家康は、すばやく自分の作戦を変更しました。

慶長五年（一六〇九年）九月十五日午前八時。家康は、美濃国（岐阜県）の関ヶ原に三成の軍勢をおびきだしました。家康のひきいるのは東軍。三成のひきいるのは西軍。

関ヶ原の戦いです。

三成はその日まで、自分を助ける軍勢がもつといるだろうと思っていました。ところが三成が知らない間に、それまで西軍に味方していた武将たちが、東軍に変わってしまったのです。家康のしわざでした。あわてている三成軍を、家康は一気に攻め落としてしまいました。

石田三成が負けたために、真田昌幸、信繁は、和歌山県の高野山のふもとにある九度山に追いやられてしまいました。真田家の長男、信幸が徳川方だったので、真田家の上田城は誰にも取られず、信幸が守るようになりました。

それから十四年後、慶長十九年（一六一四年）十月。九度山で静かに暮らしている真田信繁のもとに、大坂城から急ぎの使者が訪れました。

「もう一度、豊臣方に味方してはいただけませんか。」

関ヶ原の戦いの後。

大坂城にいる淀殿と秀頼は豊臣家が再興することを祈ってあちこちに寺を建てました。

京都の方広寺の鐘には「国家安康」「君臣豊楽」という文字を彫りました。これが家康を怒らせました。家康の家と康の文字が分けられ、豊臣が康という文字と結びついているというのです。

大坂城をすぐに明けわたすようにというのが、家康の注文でした。淀殿にも秀頼にも、どうしてよいのかわかりません。そこで真田信繁に使者を差し向けたというわけです。

「秀頼様は、これまで戦場に出たことなど一度もありません。このままでは徳川家康の前に、われわれはひとたまりをありません。真田殿、どうか豊臣家を助けて下さい。」

大坂城からの使者は必死でした。

信繁の父の昌幸は、すでに病気で死んでいました。信繁は、こんどは一人で決断しました。

「わかりました。お助けしましょう」

いよいよ次の合戦、冬の陣の始まりです。

信繁は大坂城に行きましたが、豊臣秀頼はとても気が弱く、大坂城から外に出ようとしませんでした。

信繁はしかたなく、自分の兵士を連れ、大坂城の南側にとりでを作ることになりました。

とりでは、大坂城の中で最も弱いと思える場所を選びました。家康はきつとここから攻めるはずです。

とりでは、真田丸という名前を付けました。

真田丸を守る真田の兵士は、五千人。全員が赤いよろいとい赤いかぶとを身につけました。信繁のかぶとには、鹿の角が付けられていました。真田の旗には、六枚の貨幣を図案にした「六文銭」が描かれていました。冥土の旅には六文がいると言われ、それは決死の覚悟を表す模様でした。

徳川家康は、真田幸村の強さを知っていました。真田の登場に、一步も動こうとしません。ただ遠くから真田丸をながめるばかりです。

ところが、動こうとしない家康にしぶれをさらした徳川方の武将たちが、朝早く、家康の許可を得ずに真田丸を襲撃したのです。

「信繁が眠っている間に真田丸を落とせばよいのじゃ。なあに、わしらにかかれば、ひとたまりもないこと。」

兵士たちがそつと近づいたとたん、真田丸の中から鉄砲が火を吹き、徳川の兵士たちを吹き飛ばしました。

火薬がつぎつぎと爆発します。みな、大慌てで、徳川の陣屋にむかって逃げ出しました。

真田丸とは、なんと強いとりででしょう。

信繁にはかなわないと思った家康は、大坂城の中にある淀殿と秀頼に手紙を送りました。

「大坂城の外堀を埋めさせてくれるなら、もう攻撃はしませんので。」

淀殿と秀頼は、家康がこわくてたまりません。あつさりこの申し出を受けてしまいました。

さっそく、大坂城の堀は埋め立てられ、あの真田丸も、とりこわされてしまいました。

信繁は、大坂城を囲んでいる堀がどんどん埋められていくのを見ていました。

「これで大坂城は終わってしまうのか。いや、わしにはまだ勝つ方法が一つ残されている」

慶長二十年（一六一五年）五月七日。

いよいよ大坂夏の陣が始まりました。

前もって堀をうめられている大坂城は、ひとたまりもありません。

それでも、真田信繁は、あきらめていませんでした。

「城がどんなに攻められようとも、家康の首さえ取れば、こちらの勝ちとなる。」
総大将の首さえ取れば、勝ちというのが、戦国時代の戦いのルールだったので。

信繁は、大坂城からはなれ、赤い鎧冑を身につけた真田の兵士を引き連れて、茶臼山にある家康の本陣の真つ正面から切り込みました。

「大坂城を攻めるために、本陣が手薄になっているはず。」

信繁には、計算がありました。

「まったく、信繁という武将、なんとこの強さ。」

家康は驚いて逃げ出しました。

けれど残念なことに、信繁がけがをした味方の兵士を「あつ」と振り返ったとき、敵の矢が当たりました。それが、真田信繁の最後でした。

翌日五月八日。

淀君と秀頼が自殺し、大坂城は徳川の手に落ちました。

徳川家康は、生涯、信繁のことを忘れませんでした。

「真田信繁と一度、酒をくみかわしたかったものだ。」

家康は、亡くなるまで何度も、そう言ったと伝えられています。

(おしまい)